結草
kusamusubi
publishing housse: moriyama2-19-32 Kanazawa shinsyu Ryukozan Jhokoji phone 076-252-4922
http://www.spacelan.jp/~jhokoji/ 2005.03.01

おたいしさんと私たち

大谷大学学長　木村　宣彰

ただいま紹介賜りました、木村でございます。当寺のご住職さまと同様、二〇世紀を六〇年ほど生きてきたことになります。二一世紀に入って三年たち、浄光寺さんの「おたいしさん」にご縁をいただいたことになります。

このお彼岸にはいってからテレビに流されているようにまことに不幸な争が始まっております。このニュースを見ながら様々のことを考えさせられております。

アメリカ大統領ブッシュがいっておること、わたしは正義であるイラクは悪であると常におっしゃる。私は正義だから悪を懲らしめる…だと。そういう意味合いのことを常にいっておられる。

これを聞いていると、御開山が常におおせであった「善悪の二つ総じてもって存知せざるなり」のお言葉を思うんです。なにが善いことやら、なにが悪いことであるか、わしゃわからん。この娑婆のことは……。

先にアフガニスタンでアメリカに敵対するタリバンがバーミヤンの石仏を破壊しました。驚きと悲しみと何ともいえない気持ちでテレビを見ていました。当寺のマスコミは挙て貴重な文化遺産を破壊するそれは悪だと評した。わたしも仏法に遇わさせていただいているものですから仏様が爆破されるなんてことは誠に悲しく残念に思うんです。考えてみるとなぜ砂漠の岩のところに大きな仏像が二体も彫られているんでしょうか。その厳しい環境に大きな仏像を二体も彫った人達がいたこと、その人達の気持ちを私達はよく考えねばならん。「形のあるものは形のないものをよくあらわしている」のだということを。たとえばそこに幕が動いている、向こうに樹の葉が動いている、何で動いてる。これは目に見えないものを形が私達に教えてくれてるんです。仏像が破壊された、あそこには小さな洞窟がたくさんあったのです。タリバンの兵士がたくさん隠れていたんです。以前はソ連の兵隊とタリバンが十年間戦争したがソ連はタリバンを破ることはできなかった。洞窟に隠れ、あたかも幽霊のように神出鬼没だと。今度はアメリカが特殊な爆弾を開発して洞窟を上から破壊、タリバンをやっつける。

箇々の洞窟はタリバンが戦争するために掘ったのでない。あれはズーと昔からあったお寺なんです。石窟寺院なんです。私たちは今阿弥陀さまとかお太子像を安置してご本堂に参りしております。アフガニスタンでは箇々の洞窟に本尊を彫ることは難しいのでまとめて大きな石仏を大変な苦労をして彫ったものです。そこでお参りして小さな点々とする洞窟で仏法を学び修行した。いうなれば大仏と一体となった寺院です。

大仏を破壊するのは確かによいことではない。しかし大仏を破壊したタリバンが絶対的に悪で、洞窟を破壊したアメリカが絶対に善だということはどうしていえますか。大仏と石窟が一体となったものであれば、大仏を壊したものも石窟を壊したものも同じような悪でないのかと私は思います。

そうであるとすれば「善悪の二つ総じてもって存知せざるなり」というもんだろうと。大統領は私は善でイラクは悪の枢軸であるといわれる。立場が変われば変わるかわからないのが娑婆というものです。そういうことをもっとも早く教えてくださっているのがお太子さん、聖徳太子さまです。

皆さんご存じのように「世間は虚仮である　唯仏是真である」とおっしゃっていただいた。そのお言葉は

まさしくそういうものを教えていただいてる。

また御開山聖人は「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」と同じことをおしゃってる。どうして同じように世界が見えてきたのか、それは同じように仏法に遇わせていただいたからです。娑婆のことだけを見ていると、虚仮偽りのことなのか、そら言・戯言なのかなかなか区別がつかない。だから聖徳太子さまは何が正しいか、なおすには仏法に遇うしかないとはっきりいっておられる。

私なりに振り返ってみますと、この一〇〇年の日本の歴史は二つの頂点と二つのどん底を味わってきた世紀ではなかったかと思います。明治以降東洋の一小国の日本が随分と教育等に力を入れ、頑張って、西洋の列強と同じように一等国たらんとしてきた。戦争をね、繰りかえしね。その結果得意の絶頂に一時期はありました。昭和の二〇年、どん底にあった。そこで次にどういう国をつくるのかみんな一生懸命考え、額に汗して、豊かな国をつくったのです。一九八〇年頃でしょうか、この小国が経済的には世界のトップまでになった。それがご存じのように経済のことはわからんが九〇年代に入って失われた一〇年とかといって、大変な時代に立ち至っているようです。みんな先が見えない、閉塞感と不安が増大してるんです。現在、日本はいったいどうなってるのかと思っております。母親もいったい日本はどうなってるのかというて驚いております。

今こそ衆知を集めて二一世紀の日本をつくり直さなくてはならぬとこうおもうわけです。目標を持っていなければ絶対目標を達成することはできない。人間にとって希望や目標を常に持っていることが重要と同じく国の将来についても常にあんずることが大切です。二つの頂点は軍事力、次には経済力でした。この次はどういう頂点を目指すのか。私たちは本気でよく考えなくてはならぬ。みんな景気をよくするにはどうしたらよいかを論議される。お金は粗末にできない大事なんだが、何に使うかということはとても大切。経済のために政治があるのではない。政治は私たちの理想の社会を実現するためのお金、経済なのです。経済のために政治を利用するということは本末転倒なのです。もう少しいいますと、どういう国をつくるのかという根本に道徳とか宗教など見えない世界がないとダメなんです。今の日本を見れば一番上に経済があり政治、道徳、宗教になっとる。金さえ儲かれば少々の不道徳があってもかまわんとの風潮があるのでは。

こういう状況を想うとやはり聖徳太子さまの理想を学んでいかなくてはならない時代にきているとホントにそう思います。聖徳太子というかたは、日本で最も有名なかたで、みんなもよくお顔知っている。しばらく聖徳太子さまと関わりの深い四天王寺がありますが、そこの女子高校で教鞭をとっておりました。生徒はたずねてきて「先生、聖徳太子大好きですブロマイドを大好きで集めてるんです」何のことはないお札なんです。そのように大人も子供もよく知っているかたです。お顔とお名前が一致する一番古い日本人ですよ。たしかお札に肖像が登場したのは昭和五年で、その後昭和二一年と混乱期等に登場して、景気は不思議と回復するんです。今は政治家は使わず文化人として福沢諭吉が採用されております。

太子は単なる政治家ととらえられんのだが。日本で一番古い本は太子のお書きになった、『三経義疏』です。その中の『法華経義疏』というのは日本人が書き残したもので一番古いものとして残っております。一度奈良博物館でみることができました。やっぱり感激しましたね。迫力が違う。今から一四〇〇年前に書かれたもの、目の当たりにして。紙に筆で書かれた最古のもの。一四〇〇年も続いた、驚くべきことですよ。蛇足になりますが、法隆寺に伝わっていたもので明治に天皇家に献上したものです。天皇家のものですから国宝とはいわず御物と呼ぶんだが。明治天皇はご自分の書斎にずっとおかれていたといわれます。

さきほどの高校生のように、太子はなにを教えていただいてるのか、どういうことをなさったのかというとあんまり分からん。

われわれは朝には「正信偈」をいただくがそのうちに七高僧の名があります。龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導。源信。源空です。

道綽は午年生まれなんです。太子（574～622）も厩戸王とよばれるように午年うまれですね。道綽禅師の一回りあとの午年なんです。まあ二年下の後輩なんだね。道綽は八〇歳までいきられ、太子さまは四九歳で亡くなられた。道綽禅師が存命中に太子は亡くなられた。また 有名な玄奘三

蔵（602-664）とも同時代です。不思議だな～と思うのに、太子誕生の五七四年は中国では大変な事件があったんです。北宗の武帝が廃仏、仏教をとっぱらうんです。経典を焼き捨て、仏像仏具や武器を農具へと変え農業を興隆し、二〇〇～三〇〇万人の僧を還俗させ兵士へと富国強兵策をとったんです。太平洋戦争時を彷彿させますね。国全体が豊かにになれば幸せになると。

いうまでもなく、仏教はすべての生きとし生きる人が幸せになることを願っているんですが。いうなれば武帝は国民を幸せにするためには自分が最高の僧であり国全部が寺院ならばよしという考えなんでしょう。かって現人神を奉った神国、日本と全く同じです。一四〇〇年前と一緒です。北宗は国全体が佛国であり、皇帝が如来さまだと。国民全部が如来さまと思えばいいんですね、なんかおかしいですね。

ご開山さまは太子さまを「倭国の教主聖徳皇」とめられた。日本にお生まれになったお釈迦様だとおしゃる。中国の事件の時に太子さまが丁度お生まれになったということですね。

プリントにもありますように太子のお父様は三一代の用明天皇であり、お母様は穴穂部間人皇后さまです。なんと驚いたことには用明天皇と穴穂部間人皇后さまは欽明天皇を父とする異母兄弟としてお生まれになったんです。また用明天皇のお母様・堅塩媛と穴穂部間人皇后のお母様・小姉君は蘇我稲目を父とする姉妹なんですよ。ものすごく血が濃い関係なんです。今日では許されないことなんですが、当時は男性が出かけて行ったことでそこでできたお子さんは奥さんが育てているんですから。お子さん達を別々に育てるから、父親のことは特に意識しないことになるんでしょうか。今日では考えられぬ、この関係が時として素晴らしい人を輩出することになったともいえます。

太子のお仕事はたくさんあるのですが、そこに記しておきましたように。一つに『冠位十二階』の制定がありますが、当時の社会は「氏」という生まれた血筋がすべてだったんです。そのうえにその家はどういう位とかという「姓」というものがあってみな決まってる。それ以外の人はどんなに努力してもどんなに優秀な人であってもそれを飛び越えて活躍することはできない。そういう氏姓の弊害を打破して、すべての人が活躍できるような制度をとりいれられたんです。

この制度は中国との外交上地位というものが重んぜられた関係で制度を整える必要があった。そこで仁・礼・信・義・智の五条の上に徳を重ねて大小に分け十二階とした。小野妹子という遣隋使は氏も姓も低かったんですが、功績を評価され随分と高いところまでいったんです。

それから隋との国交で有名な『日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙なきや』の文がありますね。東洋のあるかどうかわからん国から手紙が来て武帝は大変怒ったといわれる。

中国に対して日本が「日出ずる国」といっているのが気にくわない。中学校の時中国は「日没する国」になっているに怒ったと習ったように記憶してます。じつはそうではなく天子としてるところが、隋からすれば大変不遜なんです。

『隋書』によれば「蛮夷の書、無礼なるものあり」と。日本のことを文化の低い野蛮な国として、こんな手紙は今後取り次ぐなといっている。

南京の博物館に当時の中国をとりまく諸国の使節の姿を描いた絵が残っています。中国はもちろん新羅・百済・高句麗の人たちは冠を被っている。倭国の人は裸足ですよ。冠もなにもない。日本を代表する外交使節がですよ。諸国のうち最もみすぼらしい姿、これが現実だったんです。そういう使節、国から中国と同じ「天子」といわれれば皇帝がカッチとくるのも、やむおえないところでしょう。　しかし太子からすればまだ国は貧しくとも志は大きくというもので、やはり対等の外交を推し進められたのであろう。南京の品物を見るにつけ太子の志が大きなことをつくづくと思います。

ご存じのように『憲法十七条』『三宝興隆』の詔等があげられます。三宝というのは仏・法・僧でようするに仏法を興そうということを推古天皇が決断なさった。百済から仏教が伝わってきて六〇～七〇年の頃です。その間どういう態度で接してきたのか、天皇はよそから伝わってきたものを取り入れてよいだろうか。外国の神様をいれたら日本の神は怒って祟りがあるんじゃなかろうかと、いってなかなか取り入れないですね。一寸心配だから蘇我稲目さんあんたの屋敷を寺にして仏像を安置して祟りがないかどうか見てくれ。というんですよ。天皇さまは自信を持って仏教をとりいれるという決断ができないから蘇我稲目に頼んだ。

もう一人の実力者物部尾輿は何を言ってるか、外国の宗教を取り入れたらダメだ。蘇我と物部で大論争がおこる。そのうちに天然痘が流行ってくると反対の物部はそれ見たことか、外国の仏教をとりいれるから流行ったと病気が流行ったことは天皇まで伝わってきた。天皇はさっそく恐れをなして、もうだめだ仏教をやめろ！と。それを聞いた物部尾輿は仏像を捨ててしまった。捨てさせた天皇が病でなくなった。今度は逆にそれ見たことか仏像を捨てたから天皇が亡くなったんだと。こういう対立がずっと続くんです。

最初に仏教を取り入れられたのは聖徳太子のお父さんである用明天皇さまです。次の女帝推古天皇の摂政を務められたのが聖徳太子です。これまでの宗教は自分の一族だけが幸せになることを祈ったそれぞれのものだった。それではどうにもならん、全体が救われるような宗教でなければならんとせられた。

わたしゃよく言うんですよ。なにを祈りましたか、健康でありますように、宝くじが当たりますようにとか、それは絶対だめだ。自分だけが宝くじ当たるような、自分だけが幸せになるようなことは神様は聞いてくれない。私たちだって電車の中で、人を押しのけて座る人、イヤじゃないですか。自分だけが楽で、自分だけが幸せで、自分だけが儲かればよい、そういう人たちが周りにいたら嫌じゃないですか。私たちが嫌なものが神様が好きなはずはない。祈るならみんなに宝くじが当たるよう祈りなさい。それだったら聞いてもらえるかもしれない。当時の豪族の宗教はそういうもんなんです。

仏教はそうじゃないですよね。一切衆生が平等に救われるですよね。そうでないと日本の国を纏めていくことはできないんですよ。だから太子は三宝の詔を発せられたのです。推古天皇と話し合われてみんなが幸せになるようなみんなが豊かな気持で暮らせるような仏教じゃないとだめだ。これを取り入れようと。各家々に仏像が安置された、そこからですよ。お仏壇が用意されるようなったのは、この推古天皇の詔から始まっとるんです。

牧師さん達と話すと「日本はいいですね、どこの家でも仏壇があって、お坊さんお参りしてしてる。私達はそんなことはできない。教会へ来てもらわんやならん。日本の仏教はいいですよ。」と神父さんや牧師さんはいってらっしゃる。この発端は太子の「三宝興隆」の詔です。推古三二年の時、日本書紀によると「寺が四六、僧八一六、尼五六九人」になってる。太子が亡くなった翌々年です。太子のご一生のうちにこれだけお寺とお坊さんが増えてるですね。それが今日まで続いている。これは大変なご英断であったとおもうんですね。

次に『三経義疏』と『憲法十七条』があげられます。今日ですね太子像については色々な本が出され言いたい放題。中には聖徳太子という人はいなかったと一生懸命書いてる人もいる。また中国からやってきたという人、蘇我入鹿が生まれ変わったという人など様々なこというてる。

そもそも聖徳太子というお名前は太子自身はご存じない名前です。太子が亡くなってからの諡です。親鸞聖人を私達は見真大師といってると同じで親鸞聖人はご存じない。太子を聖徳太子と呼ぶようになったのは没後六〇～七〇年たってからです。あの人は偉い方だから馬厩王子と呼ぶには勿体ない聖徳太子と諡としてお呼びしましょうということになったんです。

なぜ聖徳太子といったのかと言うと「聖」は憲法をお読みになったらすぐ分かりますがこう書いてあります。「いま賢い人に遇うことは、千載にして、一人の聖を待つこと難し」と千年経っても聖のような人は出てこない。たしかに世の中には賢い人はいらしっゃる。ああすごいな～、そういう人はいる。一〇〇〇年待っても遇う事ができない人なんです。一四条に書いてある。それは正しく太子の外ないとして「聖」をかした。

さらに聖徳の「徳」は冠位十二階の徳・仁・礼・信・義の一番上の徳をとった。そこに「聖徳太子」というお名前がついたのです。だからお太子さんが亡くなられてから諡として精一杯の尊敬の念を込めてお呼びしたのです。それ以外の名前でお呼びできなかったということです。ですから太子存命中に「聖徳太子」の名前がないから聖徳太子と言う人は存在しなかったというのはおかしいですよ。私はとうてい納得できませんね。

ある人はいう、あんなに忙しい人が仏教の経典を読んで『法華経義疏』とか『維摩経義疏』・『勝鬘経義疏』なんか撰述できるわけがない。自分ができないからと云って聖徳太子もできないというのも僭越の極みですよ。そう言われる人も事実ある。

すなわち世間の秩序と、真・平等の立場と両方ともこれ共に仲良くしなさいと。同時に人間の奥底ではみ

です。よく近代の学者はよくいうんです。たとえば『阿弥陀経』を訳した鳩摩羅什を評して、あんなに若くして、あんな仕事ができるわけがない、だから年齢が間違ってるんじゃないかとかいろいろいいましてね。自分の物差しだけでは考えられませんよ。『三経義疏』も『十七条憲法』も疑う人は一杯いますよ。わたしゃよく両方読ませてもらうと、そこに貫かれている思想は共通なのです。憲法のうちには「和」ということが非常に大切になっているが社会というものをどのようにご覧になっているかというと、「君」と「民」をとりもつ「官」すなわちお役人にあたるんだがその人達の心構えがとっても大事だと云ってる。

その一方で太子は「ともにみな凡夫」、天皇も凡夫だ、大臣も凡夫だ、私も凡夫だ、すべての人みんな凡夫だといってる。君と臣と民とわけときながらどうしてみな凡夫というのでしょうか。これは秩序と大本の仏教の立場から見ればどうなるか、それは「世間虚仮　唯仏是真」の「仮」と「真」の立場を区別してる。

『三経義疏』を読むとだいたい「如来・仏」と我々「衆生」とそれを繋ぐ菩薩さまの関係がきちっとしてまして、この菩薩の位置付けがとって大切であることを終始一貫して説かれている。

みんな凡夫ですよ、人間としてはみんみな同じですよ。『三経義疏』をみると「皆、仏性をもってる」とおっしゃる。だから如来さまも菩薩さまも凡夫や衆生もみんな仏になる、仏性をもってる。みんな救われるんだ、一乗だとおっしゃってる。しかし今、如来と菩薩と凡夫とはこりゃやっぱり違うんだということをきちっとケジメをたてられる。

家庭でお父さん・お母さん・お子さん、みんな仲良くしてるんだがお父さんはお父さんの、お子さんはお子さんの、お母さんはお母さんの役割があるんじゃないでしょうか。そのことを太子は「和」という秩序が大切だといわれるのです。世間虚仮の「仮」を我々はなにか意味のないようの思うけども、大乗仏教の中で説いてる「仮」は仮が現実なんです。しかし現実の仮が全てではない。それを生み出している奥底の真理というものがある。そこに幔幕があり、幕が動いてる。動いてるのが全てではない。見えない空気があるわけです。私は一年一年と年をとっていく、それは見えるかもしれない。白髪が行は無常ですよと見えない世界を形一本、一本増えることを通して、諸が教えているのです。それを仏教で行は「仮」といってるんです

太子は常に現実の「仮」が全てではない。それを生み出している奥底の真理というものがあるそれに気づきなさいとおしゃっる。そこから太子が大きな理想と正しいもの事を見て政治をなさったと思われるゆえんです。唯仏是真という世界を見据えながら、世間は虚仮である。私達はときとして現実は仮ではなく、現実は実であると思っている。お金持ちがいて月給一〇万円もらった人はあの人は偉い人と思う。五万円の人は努力が足りなかった、あの人は駄目な人と思う人がいるかもしれない。そんなもんその時の因縁ですわ。因縁があれば今五万円の人だって一〇〇万円の月給をもらうかもしれない。逆に今一〇〇万円の人だって因縁がくれば忽ちに0円になるかもしれません。しかし私達はもので見えるもの、形、金で、全ての価値を推し計ろうとする。それでもって幸せが得られるように思っている。その結果益々欲望が起こってきて、いつまでも満足ができない。感謝ができないような泥沼にはまってる。これが現代の状況じゃないですか。

これからの社会に於いて本当に大事なものは、お金などとはちがって数字に表せないものが大事なのです。お互いの信頼関係とか愛情などです。血圧は数字で表せるかもしれん。病院に行くときにはみんな心配なんでしょう、不安なんでしょう。大変な病気じゃないかと。心配だというその気持を計ってくださいよ。そんなものは計れるはずがない。貴方の心配度六五％冗談じゃないですよ。わたしは一〇〇％心配して病院に来たんですよ。とこうなります。しかし血圧は測れるわけです。体重も量れるが計れるものは所詮そんなもんです。それは「仮な」んですよ、「実」ではないんですよ。太子はそういうことをおっしゃってる。しかし私達は戦後豊かなもの、金だけで幸せを追求してきた。その結果その気持が益々ひどくなる。そしてもの・金或いは見えるもの、数字で計れるもので幸せをおもう。

ご夫婦でおいでになってる人が、お父さん、私は貴方を信頼してますよ！幸せは数字で表せば九五％ぐらい信頼してますよ！残り五％はどうなる。お母さん、世話になったね！ありがとう！感謝してます。九九％よ、あと一％は感謝してないということになるじゃないですか。忽ち信頼関係は崩れますよ。あなた愛してますよ！九九％あと一％は隣の誰かを愛し

てるかもしれません。そういう大事なものは計れないんです。しかしみんな見えるものを計れないものが「実」だと。

しかし太子は現実の「仮」これが大事だと。大事だけどこれを「仮」と言ってるんですよ。この「仮」の奥底に大事なものがある。ところが我々はそれを「実」だと思って生きてるところに大きな勘違いがでたり、喜べなかったり、感謝できなかったり、不満が起こったりする。

それをどう克服するかというと唯仏是真だと、仏様に遇わせていただくことが大事だと。だから親鸞聖人の「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」といわれるのと聖徳太子さまのいわれることと瓜二つなんです。

そう言うことを云っていただく人は少ないんです。祈りなさい、頼みなさい、さすれば貴方だけは幸せになる。さっきいったように私だけが幸せになることだけを考えている人は人間同士でも嫌な人なんです。こんな人は神様や仏様が好むはずがない。そう言う宗教はどこかで何かがおかしいと私は思います。

一四〇〇年前に太子さんはそう言うことを私達にお示しになった。その太子さんを最も尊敬し敬慕された方は親鸞聖人です。

ご存じのように親鸞聖人の伝記を読ませていただくと一九歳の時太子のお墓にお参りになった。また法然上人のところに行かれる前に六角堂で聖徳太子のお姿の示現をえられた。そして聖徳太子さまを観音の化身と号された。親鸞聖人はそれを疑っておられなかった。「化身」とは化けたような何かボヤッとしたものを私達は感ずるんですが、「化」が「現身」なんです。「化身」を於いて観音の姿はないんです。

そもそも観音とはなんぞや、親鸞聖人は『三帖和讃』に五四〇首くらいのご和讃をお作りになっております。その中で二〇〇数一〇首は太子の和讃なんです。その内の半分くらいが太子の和讃なんです。その内の半分くらいが繰り返し繰り返し聖徳太子は観音の化身だと仰せになっておられます。じゃ観音は何か、阿弥陀さんには観音と勢至と、阿弥陀さんとはなんぞや、阿弥陀仏の智慧を象徴するのが大勢至菩薩、阿弥陀仏の慈悲を象徴するのが観世音菩薩です。その観音の化身、阿弥陀さんはどこにいらっしゃるのか、阿弥陀さんの慈悲というのには形があるのか。親鸞聖人からすれば形をもって現れたのは聖徳太子、これはもう「現身」なのです。私達は対峙して阿弥陀さんの慈悲の権化である観音さんをまのあたりに見ることができるのは太子さまの「化身」を通してしか会えない。「化」というと何か夢幻のように思う訳だけと、親鸞聖人からすれば「化身」はまさに「現身」なんです。姿のないものが姿をもって現れていただいた、それが「化身」なんです。

お母さんが子供に深い愛情を持っておられる、しかしお母さんの愛情には形がないのです。私の心を見てくれといったって、心を破ってみるわけにはいかんのです。子に対して平等の母としての愛情をもっていらしゃる。それはたまたま、ぐっと抱きしめてやると子供は自分に愛情を持ってるんだな～ということを感じるかもしれない。それが今云ってる「化身」のようなもの。だから姿もない形もない阿弥陀さんの慈悲が具体的な形をもって現れている、「現身」それをご開山は観音の「化身」とおっしゃる。我々は実感しないもんだから「化身」かぁ～となる。ご開山は本当に姿もない形もない阿弥陀さまの慈悲は私のためにあるんだと。

たとえば六角堂の九五日めの朝に私の前に姿を現していただいた。勿体ないと、こう思うてる。そして太子の記された文章によって私の進む道が決まったと言うんです。

「君そこへ進みなさい必ずいけますよ。」と方向が決まった、方向が決まることがとても大事なんです。方向が決まればそれに向かって努力すればよい。何処へいって善いのかわからんというのは生死の出る道が分からんということなんです。だいいち三月間もずうーと思い続けて、九五日目の朝に私の前にお姿を現していただいた。

私だったら喜びますよ。驚天動地ですよ。ご開山は驚かれ、奥様に伝えられた。だから恵信尼公（親鸞の妻）がそれを記していただいた。我々はついつい「化身」などというとあるかないか分からん、要するに朝寝ぼけたように思うそれがまさに「現身」なんです。それが私のために現れていただいたと言うところが尊い。だから親鸞聖人はずっと太子さまに尊敬の念をお持ちになっていたんです。

先ほども云いましたが太子の和讃を二〇〇首以上もお作りになってい

る。それも八〇歳過ぎてからですよ。建長七年（1255）十一月の晦日に八三歳に『皇太子聖徳奉讃』七五首をお作りになった。今日高齢化社会になりましたがこれだけでも希望が与えられます。あ～ご開山は八〇歳を過ぎてからこれだけのものをおつくりになった。わたしも八〇になっても頑張らねばと思いませんか。

さらに一二首和讃というものが八五歳になってからあります。どうして八〇歳過ぎてから急にこれだけのご和讃をお作りになったのか。その理由は書いておられませんが、一つには八十三歳、鎌倉時代では相当な年と思うがその時にご開山にとって不幸なことが起こった。

ご存じのようにご開山は関東で教えを広めておられたのだが、六一歳の時京都に帰られた。ご開山がいらっしゃるときにはどのようにお念仏をいただいたよろしいんでしょう、この教えはどうなんでしょうなどと尋ねることができた。ご開山が京にいかれ関東の人々はみんな混乱してきた。二〇年ぐらい経つと様々な異義、異安心がでてきた。造悪無礙、どうせ救われるのならなんでもしてやろう。ご開山がいってる。「薬があるからと言って毒飲むな」と。この毒どうせ薬があるなら毒飲んでやろう。そんなんだめですよ。そこで息子善鸞を関東に派遣する、ところが善鸞さんは困った問題を引き起こすんです。

あなた達は父よりいろいろと十八願の教えや他力の教えを聞いてるんでしょうが。わたしは夜、特別に聞いたんだ。「十八願の他力本願、あれは萎んだ花のようなもんだ。今の時節ではもう効果ないと」と勝手なことを云うんです。そこで八十四歳になって自分の息子を義絶しなきゃならなかった。その義絶した手紙が今日残ってる。

それは建長八年五月二九日に京都の親鸞さまから関東へだされたものです。関東の善鸞に届いたのは六月二七日です。そこには「自分の息子が夜中に一人だけ聞いたと言って間違ったことをいってる。これは悲しいことだ。」とながながと綴ってる。八五歳になって自分の息子と縁を切らなくてならない気持、察するにあまりあります。

「十八願を萎んで枯れそうになった花だといって折角の教えを捨てさせた。これは誹謗正法である。これは正しい仏教の教えをそしるものである。さらに関東のお念仏の仲間達を十八願にたすく人とそうでない人と分裂させ教団の分裂を計る、これは五逆罪の一つ」と。

五逆というのは父母、阿羅漢の殺害、教団の分裂、そして仏様の躰を傷つける。教法をそしる、そして教団の分裂を計る、破和合僧なんだ。さらにこうおっしゃってる。親鸞をそらごと、嘘ついてると云う。これは自分の父を殺すという五逆の一なんです。父親の云ってる教えは間違ってる、私だけが正しいことを云ってるというのは、刃で殺すのではないが父を殺すことと同じ事だ。五逆罪だ！そこで「いま親ということあるべからず、子と思うことおもいきりたい」。八四歳のご開山が自分の息子を自分の息子と思うことを思い切りたい。おもいきって縁を切るといわれる。悲しきことなんです。

そういう事件があったときにご開山がずっと思い出されるのは、観音の化身、聖徳太子さまです。

太子の和讃を詠むと、父のごとく母のごとく敬愛されてる。誹謗正法を犯した自分の息子は無間地獄に堕ちて、八〇億劫たすかることのない苦しみを受ける。でも縁を切っていかねばならない。しかし縁を切ったからと云っても肉親の情はとてもなくなるとは思えない。息子はどうするんやと。

そういうときに現実の両親を超えた永遠の父あり母である、観音の化身である太子にたいする思いは強く起こってくる。和讃に繰り返し繰り返し「救世観音大菩薩・聖徳皇と示現して・多多のごとくすてずして・阿摩のごとくにそいたもう」世の中の苦しむ人をたすけるために聖徳太子の姿をもってて現れいただいたのです。多多とはインドの言葉で、タータで今に云うパパと同じ、阿摩というのは母親で添いたもうのです。そういうご和讃がずっと出てきますね。「無始よりこのかたこの世まで・聖徳のあわれみに・多々のごとくにそいたもう・阿摩のごとくにおわします」と大昔から現実世界までもずっと、いろんなものに形を変えて。インドとか中国とかで。中国では慧思禅師という名前で。あえて現実の姿をあらわして、末法の世の人々を救っていただいているというのです。縁を切った自分の息子が阿鼻地獄に堕ち八万劫にわたって長い時間苦しむ、親子の縁をきって、念仏者に正しい教えを伝えたけれども、自分の息子をそのままほっといても善いか。

「子とおもうこと、思い切りたい。あの子はもう私の子ではない、悲しきかな。」と言う境地になったとき、縁を切ったからそれでよいと言うこ

とにはとてもならんと思う。その子をどうするんだと。わたしに姿を現してくださった、阿弥陀さまの慈悲の権化である太子への思いは、永遠の父、永遠の母への、なんとか自分の息子の、また自分自身の気持ちをも聞いていただきたいと。一人の父親として、悩むご開山の尊いお姿があるんじゃないですか。それは当然起こってくると思いますね。わたしはそれで太子に対する敬語のご和讃をずっと作られたのだろうと思います。

その時にご開山はこういう事を言っておられます。ご消息の広本にあるんですが「仏法を破る」これは外から破るのではない。だいたい権力者が弾圧をしたり、領家、地頭、名主が念仏は駄目だというのではない。念仏の教えを破るのはまさに「獅子身中の虫獅子を食らうがごとし」。獅子は百獣の王ですから外からくる敵は何も怖いものはない。しかし獅子の躰に宿った虫が獅子を食い破っていくんです。

念仏者の破るのは仏教者自身のなかにある。じゃそう言う人たちを捨てておくのか。逆悪もらさず救っていかなきゃならん。五逆罪を犯す人や誹謗正法の人を救っていく。何処にお願いしたらいいのか。それは父の如く母の如く姿を現す太子にお願いするよりほかない。それは肉親の親以上の永遠の母親そう言うおもいがご開山のお気持ちの中に起こっていたのでしょう。そういうお太子さんへの思いをもっておいでではなかったかと私は拝察をしているのです。

『世間虚仮　唯仏是真』という言葉も仏法の中にそういう言葉があるわけではない。八万四千の大蔵経を見ましても何処にもない。しかしお太子さんは仏法を聞いて、学んで自分の言葉で領解された。そして教えていただいた。

それまで現実のこの娑婆が世間が「そらごと、たわごと」だといってる人は当時誰もいなかった。太子が初めてそうおしゃったのです。

鎌倉時代にご開山が火宅無常の世界、煩悩具足の凡夫のこの娑婆はみんなそらごと、たわごとだとおしゃった。それとピッタリ一致しますね。それはみえる形のあるものを通して、唯仏是真の真はかたちのないもん。先程来云っております愛情が数字で表されないように、そういう世界を太子もご開山もお示しになったのです。そのことに気づくそれは感謝せざるをえない。私達はそういう教えに遇わさせていただいたのです。これは本当に奇しき因縁だとおもいます。ご開山も法然上人にあい念仏の行者になられたのも、聖徳太子の化身、六角堂があったということに感謝しても感謝しきれない。もしこの神に祈りなさい、健康を保って儲かりますよ。こうなりますよ、といったら毎日祈って欲望は果てしなくなる。一〇〇万ほしいと思うと今度は二〇〇万欲しくなる。いつまでも満足できなく、いつでも苦しむことになる。無間地獄を彷徨わねばならん。しかしそういうふうにならずにお念仏にあわせていただいた。こりゃ聖徳太子の恩徳だと、ご開山は思っていらっしゃる。

今日はお話しできませんが『三経義疏』の「勝鬘経義疏」というお経があります。仏法は中国から伝わってきた。ご開山の『教行信証』も道元の『正法眼蔵』も中国の人は誰も読んでない。親鸞聖人も道元禅師も日蓮聖人もみな中国で書かれたものを読み勉強された。日本の祖師方が書いたものは一つも読まれていない。しかし読まれているものは聖徳太子の『三経義疏』なんです。中国の人はそれを読み、研究して更に注釈書を明空という人が書いてる『勝鬘経義疏私鈔』に日本人が書いた仏法書を本場の中国の人が読み研究し注釈書をかいてるんです。

他に例はありません。渡来した鑑真の弟子達が中国へ伝えたからです。不思議なことに叡山におられた慈覚大師円仁という座主が中国に仏教を学びにいってる、その時中国で会ってるんですね明空さんに。倭国の教主聖徳太子の『勝鬘経注釈書』を研究している、そんなものがあるかと吃驚仰天してる。それを書写して日本に持ち帰ってる。

だから聖徳太子の位置づけは東アジア全体で考えねばならん。政治家でもあり文化人でもあり仏教者でもある人なんです。二世紀の混迷窮まる世界でどういう社会を創るのか、太子から学ぶべきものがまだまだあるのではなかろうかと思っております。ありがとうございました。

へんしゅうこうき

本稿は二〇〇三・三月浄光寺の『おたいしさん』の法話録です。浅森邦男氏が亡き母を偲び、テープ起こしされたものです。紙面の関係上一部割愛し、記載いたしましたことご了解ください。

「結草」くさむすびは『結草・啣環』くさをむすび・たまをふくむ。魏・後漢の、ともに恩を知り恩に報いた故事。いわゆる「知恩必報」として、いただいたものです。皆様方のお声をお待ちしております。